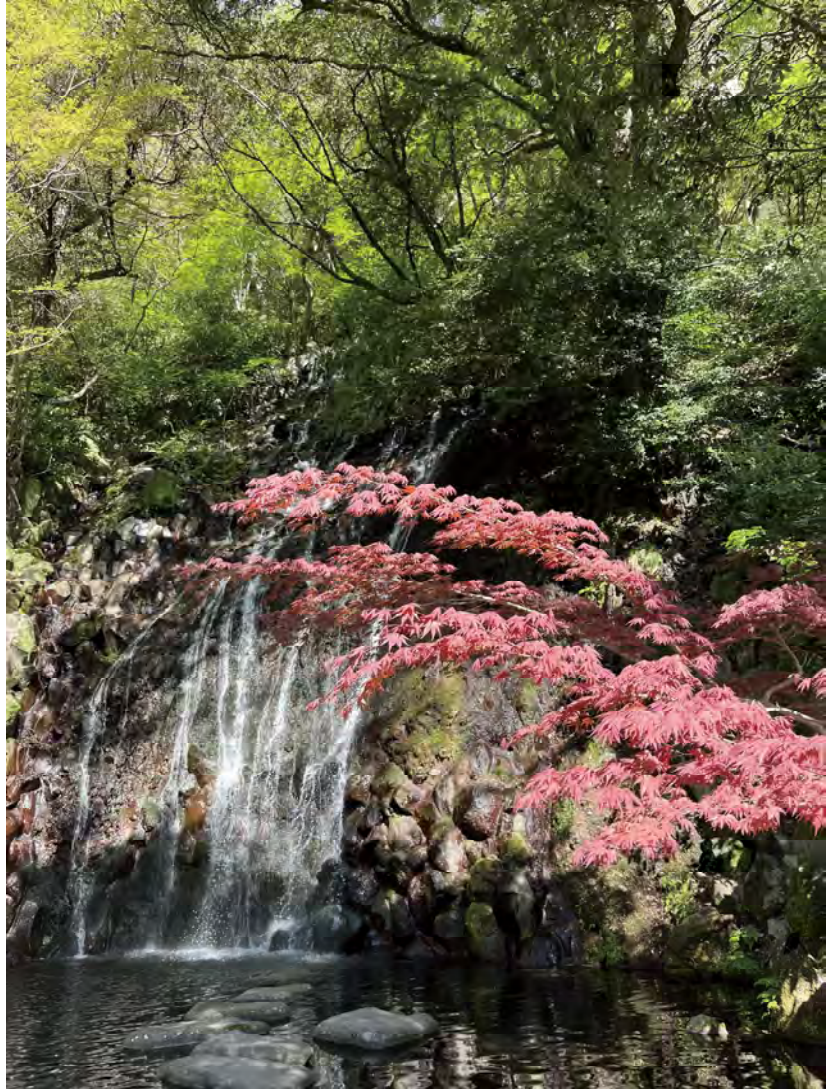


令和5年度
中学生の主張
in
かながわ

記録集 2023



はじめに

今年で45回目を迎えた「中学生の主張 in かながわ」は、「少年の主張全国大会」の神奈川県大会として、すっかり定着しています。引き続き感染防止対策を徹底する中、「どのようにすれば、より例年に近い形で届けられるか」を軸にして、安全に大会を行えるよう準備が進められました。

中学校では、新型コロナウイルスの5類移行における新たな生活様式が定着しつつある中、本年度も熱意があふれ、手書きの温もりのある作品の応募が多数ありました。

9月24日に県立青少年センターで開催された発表大会では、「いかに生の感動を届けられるか」に重点を置き、会場には選出された発表者7名のほか、奨励賞受賞者10名、保護者、5名の審査員、スタッフ、一般の観覧者が入室して発表を見守りました。また、審査結果を待つ間のアトラクションについては、本年度は県立岸根高校演劇部による即興劇アイスブレイキングを、受賞者参加型で体験しました。そして、多くの方々のご協力により、発表大会は無事終了し、本県の代表として、横濱中華學院中学部・1年の小林慈月さんを全国大会に推薦することができました。

発表大会では、思いやりやマナー・スポーツマンシップの素晴らしさを訴えるもの、言葉の重みや自分らしさ・他者との違いを受け入れることの大切さや日常生活で感じたことなど、個性の多様な在り方についての危惧や実感を訴えるものなど、様々な題材を、それぞれの生の声で個性豊かに表現していただきました。

応募作品の中には、昨年同様新型コロナウイルスや部活動に関する作品がありましたが、今年5月に施行されたこども基本法にあるように、子どもの声を高らかに主張として挙げている傾向が見られました。校則や週休・宿題等学校生活に関する見直しの提言、政治や選挙・税金に対する考え、SNSモラルや生成AIについて考えた作品や、世界情勢を鑑みた平和への意見、環境問題、動物愛護、LGBTQに関する内容も多くありましたことは、今年度の大きな特徴でした。

本記録集には、本年度の発表大会に選出された7作品と、奨励賞に選出された10作品を収録しています。この記録集を通して、中学生の純粋な想いを多くの方にお届けできれば幸いです。

最後になりましたが、本事業の実施にあたり、県内各中学校の関係者の方々をはじめ、ご応募いただいた中学生の皆さん、ご指導に当たられた先生方、そして、ご協力いただいた全ての方々に心から感謝を申し上げます。

令和6年1月

神奈川県立青少年センター
館長 山中 毅

発表大会の様子



最優秀賞（神奈川県知事賞）

小林 慈月さん



森田 結衣さん



井上 恵さん



本間 誉さん



宮下 輝香さん



滝澤 咲歩さん



益井 英輔さん



副賞：鎌倉彫の箸



審査員の先生方



会場の様子



アトラクション（県立岸根高校演劇部）



最優秀賞（神奈川県知事賞）



講評（溝口審査員長）



優秀賞・奨励賞受賞者のみなさん

目次

◆はじめに	1
◆中学生の主張 in かながわ発表大会の様子	2
◆作品集	
最優秀賞（神奈川県知事賞）	
「善意のバトン」をつないで	
小林 慈月 横濱中華學院中学部 1年	5
優秀賞	
言葉の重み（神奈川県教育長賞）	
森田 結衣 横浜市立大綱中学校 3年	6
憧れ（神奈川県福祉子どもみらい局長賞）	
井上 恵 横浜共立学園中学校 3年	7
境界線を乗り越えて（神奈川新聞社賞）	
本間 誉 伊勢原市立中沢中学校 3年	8
普通のために動いてみること（NHK横浜放送局長賞）	
宮下 輝香 伊勢原市立中沢中学校 1年	9
池に行け（t v k賞）	
滝澤 咲歩 神奈川県立相模原中等教育学校 2年	10
野球に学ぶ（神奈川県青少年育成アドバイザー連絡協議会会長賞）	
益井 英輔 慶應義塾普通部 3年	11
奨励賞（神奈川県立青少年センター館長賞）（50音順）	
ピラニア人間	
大村 莉子 横浜市立大綱中学校 3年	12
「繋ぐ」	
栗原 野々香 横浜共立学園中学校 3年	13
小さな「被災」に目を向けて	
小島 柚月 藤沢市立鶴沼中学校 2年	14
私が私らしくあるために	
斉藤 栞菜 横浜市立上永谷中学校 2年	15
目標という石に穴を開けるには	
笹部 葵 横浜市立大綱中学校 3年	16
定規で描く円	
瀬尾 葵 神奈川県立相模原中等教育学校 2年	17
「みんな」って誰？	
田邊 寛菜 横浜共立学園中学校 3年	18
「小さなことを大切に」	
戸高 颯南 神奈川県立相模原中等教育学校 1年	19
「当たり前」をつくる	
深堀 絢心 横浜市立大綱中学校 3年	20
「見る」	
柳原 萌々子 横浜市立生麦中学校 3年	21
<参考> 「第45回少年の主張全国大会～わたしの主張2023～」内閣総理大臣賞受賞作品	
私が歩む夢への道	
矢曳 未来 鳥取県 米子市立東山中学校 3年	22
◆実施概要	23

最優秀賞（神奈川県知事賞）

「善意のバトン」をつないで

横濱中華學院中学部 1年 ^{こばやし}小林 ^{いつき}慈月



電車の中。若い人たちが席を占め、彼らの前にはお年寄りたちがつり革につかまって立っている。若い人たちは目の前のお年寄りたちには見て見ぬふりで小さなスマホに夢中になっている。

こうした光景は誰しもが目にしたことがあるでしょう。僕も何度もありますが、日本に帰ってきたばかりの時はとても驚きました。なぜなら、帰国する前までこうした光景を見たことがなかったからです。

僕は1才から小学3年生まで台湾に住んでいました。僕の住んでいた台北も日本と同じように電車やバスを利用する人が多いです。台湾生活の中で、電車やバスでは譲る・譲られるのが当たり前でした。お年寄りやけがをした人、妊婦や小さい子どもに席を譲るのは当然の光景でした。ある時には、「這邊有空位喔！（こっちに空いている席があるよ!）」と遠くから呼んでくれたり、ベビーカーを運ぶためにバスから降りてきてくれたりした事もありました。

僕は母から小さい時の話をよく聞くのですが、「善意のバトン」と僕たちが呼んでいる話が好きです。ある日、ベビーカーの僕と母は、急な大雨に遭い、道ばたですぶ濡れになりながらタクシーを待っていました。しかし、どのタクシーにも人が乗っていて、なかなか捕まえることができません。するとその時、客を乗せた1台のタクシーが僕たちの前に止まりました。そうしたら、運転手の人が窓を開けて、「對不起，現在車裡有人所以我不能讓你們搭，但請用這個等計程車！（ごめんなさい、今人が乗っているから乗せてあげられないんだけど、これを使ってタクシーを待っていてください!）」と言って、自分の折りたたみ傘を母に渡し、再び走り去って行ったのです。その後、母と僕は傘をさしながらタクシーを待つ、無事家に辿り着くことができました。とても感動した母は、その傘を自分のものにはせず、「善意のバトン」として、傘がなくて困っている人に渡したそうです。

台湾の人たちは、どんな時でも、誰に対しても、気軽に声を掛け、関心を持ち、自分から進んで譲ってくれたり、助けてくれたりしようとしています。他の人のことを気遣い、思いやるのが当然だと考える、こうした台湾の人たちの心を僕は素敵だと思うし、僕自身もその思いやりの心を常に持っていたいと思います。

ですが、思いやりの心を持って、周りの人に心配りをしても、気持ちよくなつがっていないこともあると思うようになりました。

ある時友人が、「この間電車で勇気を出して席を譲ろうとしたけど、『いいです』と言われて、どうすればいいかわからなくて恥ずかしかった。もうあんな恥ずかしい思いをしたくないから、自分から譲るのは迷うな。」と言っていたのです。

僕は思いやりを受け取る側の人の心のあり方も関係するのではないかと思います。僕も以前電車で席を譲ろうとした時に、「あ、いいです。」とあっさり言われてしまいました。もし、この時にこんな風に返されたらどうでしょう。「次で降りるから大丈夫よ。ありがとうね。」と。たとえ必要がなかったとしても、感謝の気持ち「ありがとう」を一言返すだけで、お互いにほっこりしますし、譲ろうとした人も「また今度も声を掛けよう」と思うようになれます。これもまた、一つの「思いやり」です。

思いやりの心を持ち、お互いのことを考えて、受け入れる。その心があれば、譲り合ったり、助け合ったりすることができ、社会で協力し、つながり合うことができます。

家庭の中でも、地域でもどこでも、自分から進んで行動し、また相手に感謝の心を持つ。一人一人が他人を思いやり、「善意のバトン」をつなげば、社会ともしっかりと深くつながるのではないのでしょうか。バトンは、持つ人がつなげようと、受け取る人がつなげようと思うことで、初めて成立するのです。僕は世界中の人たちと、「善意のバトン」リレーを続けていきたいです。このリレーの先には平和な社会がきっと待っているでしょう。

優秀賞（神奈川県教育長賞）

言葉の重み

横浜市立大綱中学校 3年 ^{もりた}森田 ^{ゆい}結衣



「お母さんの子供に生まれてこなければよかった。」

母と喧嘩をした時、ついそう口にしてしまった。本当は母のことが好きで好きで仕方ないのにもかかわらず、自分がどれだけ傷ついたか気づいてほしくて、咄嗟についた嘘。唇を震わせ、目を伏せている母を見て、私は自分の大きすぎる失言に気づいた。言葉を撤回しなくては、と頭では分かっているのに変な意地が邪魔をして謝罪を言いたせない。結局謝れないまま時間が過ぎていったある日。

私の母は事故で亡くなった。私は母の棺桶の前に大泣きをした。一生分の涙を枯らしてしまうのではと思ってしまうほど、泣いた。鼻声になりながら何度も何度も「ごめんね、ごめんね。」と繰り返した。けれども、目の前にいる母は、蒼白な顔をしたまま微動だにしない。

「どうして生前に言えなかったんだろう。」

私は激しい後悔に苛まれた。もし、生前母に謝っていたのなら、最後まで母との温かい思い出に包まれながら見送ることができていただろう。その時に私は、初めて「言葉の重み」というのを感じた。

言葉というのは不思議なもので人を温めるぬくもりになることも、人の心を鋭くえぐる刃にもなりえる。私は、今回「言葉」という道具の使い方を間違えてしまった。

そして、私と同じように現代の日本も SNS などを通じて、人と気軽に会話できるようになった反面、「言葉の重み」を考えず、軽々と思ったことを伝えて人を傷つけてはいないだろうか。

先日、りゅうちえるさんという芸能人の方が自殺によって亡くなってしまった。彼のブログのコメント欄をさかのぼると、生前には彼のもっている価値観などに対し批判的なコメントが多く見受けられたのに対し、自殺を報道された今では、彼を賞賛するコメントで溢れかえている。本心とは異なることを伝えたり、場面や状況に応じて変えたりすることができてしまう「言葉」は、一度使い方を誤ってしまうと、その人にとって一生消えない傷を作ってしまうこともあるのだ。

そんな「言葉」を上手く使えるようになるために、私は言葉を言うときや書くときには「言葉の重み」を考えながら伝えることが大切だと感じた。例えば、私があの頃「言葉の重み」について考えて発言をしていたら、間

違っても「お母さんの子供に生まれてこなければよかった。」と言い、母を傷つけることは無かっただろう。りゅうちえるさんの件も、直接的な死因はまだ分からないとはいえ、ネットユーザーが「言葉の重み」を考え、誹謗中傷を書き込んでいなければ、彼の精神的苦痛はだいぶ少なくなっていたのではないだろうか。

気軽に言葉を発信することができる今の時代だからこそ、私達は今一度「言葉」という便利な道具を振りかざす前、自分の持っている道具がどれほど重く相手にのしかかるか考える必要があると思う。一度、言葉の使い方を誤って人を傷つけてしまった私だからこそ、これからの人生は、「言葉の重み」を念頭におきながら人に接し、人のぬくもりとなれるよう生きていきたい。そして、人のぬくもりになれるようになった私なら、天国の母に必ず言える。

「お母さんの子供に生まれてきて本当によかった。」

優秀賞（神奈川県福祉子どもみらい局長賞）

憧れ

横浜共立学園中学校 3年 いのうえ めぐみ 井上 恵



海外といえどどのようなイメージが湧くだろうか。私は城や宮殿があり、人々は皆陽気で、おいしい料理がたくさんあるイメージだ。日本にはない文化を見たいという思いから、私は海外に憧れている。また、誰もが一度はそのような経験があるだろう。しかし、異国への憧れは今に始まったことではない。例えば戦国時代、織田信長は西洋の技術や文化を取り入れた。明治維新では、現在の日本の礎を築いた人々が欧米に渡り、学問や法律制度を学び、国の発展へと繋げていった。このことから、いつの時代も日本人は海外に憧れを抱いていたことが分かる。

私は今年の夏休み、海外への憧れが一段と高まった。なぜなら、イギリス人の友人に会い、イギリスの街並みや学校生活について聞く機会があったからだ。彼女はロンドンから一番近い島であるワイト島に住んでおり、街はレンガ造りの家が建ち並び、彼女の家は築百年以上の歴史があるそうだ。また、ヴィクトリア女王が愛した離宮やビーチなどの観光スポットも多いらしい。学校では様々な楽器を演奏する機会があり、部活動は掛け持ちでできるため、多くの分野に挑戦できる。日本にはない街並みや個性が重視される教育、学校での過ごし方が私にはとても魅力的に聞こえた。そのため、私が彼女に「イギリスいいな。私もイギリスに住みたい。」と言うと、彼女は「イギリスはつまらないよ。」と衝撃的な一言を返してきた。理由を聞くと、ワイト島には日本のようにショッピングできる場所がないことや、イギリスは年中涼しい気候のため、収穫できる食材が少なく、海があっても入れないなど、娯楽が少ないからだそう。逆に彼女は、日本は賑やかで、料理がおいしく、アニメや漫画があるので日本に住みたいと言ってくれた。近年、イギリスでは日本の文化がブームになっており、日本のファッションブランドがあったり、コスプレイベントや日本のアニメソングの演奏会が行われたりしているそうだ。

私はイギリスでも日本文化が流行していることを知り、嬉しくなったと同時に、自分は他国に憧れてばかりで自国の文化や伝統を大切にできていなかったと思った。

私は、勝手に外国人はお寺などの日本の伝統文化が好きなイメージを持っている。

先日、鎌倉の駅から離れたお寺に行った際、日本人よ

り外国人の方が多く、その方々のほとんどが、茶屋で抹茶を飲みながら日本庭園を眺めていた。日本人より日本の風情を感じているように見受けられた。

ここまではイメージ通りだが、日本人からすると意外な理由で観光客が集まる場所がある。それは渋谷だ。外国人の多くは、一つの場所に人が密集する状況がめずらしいため、見てみたいという理由で渋谷を訪れるそうだ。外国人向けの日本のガイドブックには、観光名所として、渋谷のスクランブル交差点を見下ろせるカフェが紹介されている。日本人は渋谷に行く時、人の多さを見る目的では行かないだろう。むしろ、私は人混みを好まない。日本人からすると日常の風景でも、外国人にとっては刺激的なのかもしれない。視点が違うと同じものに対してここまで異なる感情を持つことに驚いた。では次に逆パターンを考えてみよう。先ほど記したように、イギリスにはレンガ造りの建物が建ち並んでいるが、現地の人には日常的な風景だ。しかし、レンガ造りの建物を見る機会の少ない日本人にとって、イギリスの街並みは芸術的な美しさを感じられる。

これらのことから、日本人、外国人に関わらず、自分の身の回りにないものに憧れることがある。しかし、本当にそれで良いのか。「いただきます」や「ごちそうさま」のような日常の風景に溶け込んでしまっている自国の文化も大切に守っていく必要があると思う。グローバル化が進む現在、昔に比べ、伝統文化への関心が低下し、他国の文化が多く取り入れられているが、まずは自国の良さを見つけてみると良いだろう。全ての国の人々が全ての国に憧れ、自国も海外の文化と同じにしようとすれば、国ごとの特色がなくなり、憧れが消え、つまらない世界になってしまう。

身近なものの重要性に気づくことは難しい。人はつい、無い物ねだりをしてしまう。しかし、海外の人も評価してくださる日本文化を私たちは知り、後世へ伝えていく義務があると私は考える。長い年月をかけて成立した文化はその国の一番の個性なのだから。

優秀賞（神奈川新聞社賞）

境界線を乗り越えて

伊勢原市立中沢中学校 3年 ^{ほんま}本間 ^{ほまれ}誉



「実は私、クリスチャンなんだ。」

私は毎回、この言葉を友達に伝えるとき、不安に襲われます。しかし、ある時から、私は変わりました。

今年の春、ある友達に「実は私、クリスチャンなんだ。」と打ち明けました。私はてっきり「何それ。」と言われてたり、不思議な顔をされたり、馬鹿にされたり、興味の無い相づちが返ってくるだろうと思っていました。ところが、全く予想もしなかった反応が返ってきました。

「そうなの。私もだよ。」

腰が抜けるほど驚いたこと、そして、同時にこれまで感じたことの無い心からの喜びが込み上げてきたことを今でも鮮明に覚えています。

私はその友達に、「クリスチャンであることを言うのがいつも怖い。それを知ると大抵の人から壁を作られてるんじゃないかなって思ってしまうんだ。それに、友達が信じられないときがあるんだ。」と伝えました。すると友達から鋭い一言が返ってきました。

「もしかしたら、壁を作られたんじゃないなくて、自分で壁を作ったんじゃない。」

その言葉に私はハッとさせられました。幼い頃から、周りの子と違うということを感じながら生活してきました。そして、周りの人から私は違うと思われている、壁を作られていると勝手に思っていました。しかし、それは違いました。確かに、相手から見えない壁を作られ、避けられてしまうことがありましたが、それ以上に私自身が無意識に周りの人と壁を作ってしまったことをその友達に教えられました。また、私は他の友達のことを自分の経験から勝手に決めつけてしまっていたこと、そして、友達を信じられなくなった理由が自分のことを信じていない私自身にあることに気付かされました。私と友達、私と他者、今の私と過去の私。それぞれ目に見えないけれど、確かに存在する境界線があることを知りました。

誰も、自分と他者を比べて落ち込むことや、そのギャップに苦しむ経験をするところがあるのではないのでしょうか。その結果、他者のことを信じられなくなったことがある人もいます。

私は今回、自分が経験したことから、ほんの少しの勇気を持って、自分が大切にしていることと自分の本音を

打ち明ける、ということを伝えたいです。それは、ある意味、他者との境界線を越えていくことでもあります。クリスチャンであることを言うのは、不安で怖かったけれど、私は、自分について友達に話すことで、素敵な友達と出会うことができました。そして、心から友達のことを信じられるという喜びに満たされました。

AI やロボットは生産性が高く、使いようによっては便利ですが、人間のような感情や多様性はありません。人には心があり、それぞれ特有の個性があり、世界中に同じ人は誰ひとりいません。そんな違い、境界線があるというのが人の素晴らしいところだと思います。とはいえ、違いや境界線があるから、心があるからこそ、人は悩みます。そのような悩みや心の貧しさから、いじめなどの問題や差別、犯罪、そして民族や国同士の戦争にまで発展してしまうと私は考えます。特に、いじめなどの人間関係の問題はその代表であるのではないのでしょうか。きっかけは些細なことがほとんどで、例えば、相手のことを羨ましく思ってしまったたり、それが妬みに変わってしまったたり、ちょっとした感情のもつれが対立につながり、いじめや争いの原因になりえます。また、私のように相手のことを勝手に決めつけてしまい、無意識にレッテルを貼り付けてしまうものです。

私たち人間は、無意識でいたら、このようないじめや差別、犯罪、民族や国同士の戦争を解決することはおろか、すぐにそれらに手を染めてしまいます。しかし、他者との境界線を知った上で、自分自身と他者のことを信じることで、素の自分を相手に伝えることができます。

これからも私は、自分と他者との違いについて悩むことや、落ち込むことがあると思います。そんな時は、友達の言葉と自分の経験してきたことを胸に、本当の素の自分について伝えていきたいです。違いという境界線を乗り越えて。

優秀賞（NHK 横浜放送局長賞）

普通のために動いてみることに

伊勢原市立中沢中学校 1年 ^{みやした}宮下 ^{てるか}輝香



3歳の頃から始めたクラシックバレエ、小学2年生からコンクールに出るようになり、友達も居たし、憧れるヴァリエーションもいっぱいあって毎日夜遅くまでがむしゃらに練習した。両方の祖父母が遠くまでコンクールを見に来てくれて、帰りには抱え切れない花束をもらい嬉しくて誇らしい日もあれば、たくさん泣いて記念写真どころではない日もあった。友達より順位が良くないことを気にして楽しくないときもあった。

そんな日々と努力は私をいくつかの大きなコンクール入賞まで導いてくれた。大きな舞台でのくるみ割り人形に参加したこと、清里の野外ステージで素敵な入賞者と踊ったこと、この10年をふと立ち止まり思い出してみるとメリーゴーランドのように私の心の真ん中でキラキラと輝いている。

この春に中学生になり、私が過ごす時間のいろいろなことが変わった。部活に入りたい、小学校卒業の頃にそう決めたことは普通のことのようで私にとってはすごく大きなことだった。

私がそのような考えになったのは勉強や家のこと、遊ぶことなど、バレエ以外の普通のこと人よりもできていないような気がして、このままでいいのかなと不安に駆られることが今まで何度もあったからだ。

例えば、今までは友達の家に行くのも習い事の合間を縫って行くので母に車で送ってもらおう。次にいざ自分だけで自転車で向かうとどこで曲がるのか全然わからなかった。道なんて気にして覚えておこうとか今まで思わなかった。また、最近は部活の練習試合でバスを利用することがあるが、乗り方も長い乗車も慣れなくて気分が悪くなった。他にも今まであまりしてこなかったことがいくつもある。

母から年下の面倒を見るのが得意じゃないよねと言われることがあり、言われる度に前から心の中で少しむっとしていた。

そんな私が部活に入り感じたことは、先輩に声を掛けてもらえる嬉しいうるさげられること。面倒を見るとかじゃなく、周りの人を気にかけて何かあったら言ってね、教えるよという気持ちで率先して動くことなんじゃないかなと思う。大きな声でリーダーシップを発揮できるタイプではないけれど、穏やかで話しやすい後輩から頼ら

れる先輩になれたらいいなと思う。

1学期は初めての中間期末テストも経験し、人生で一番忙しいのではと兄が言う中学生生活が本格的に始まったところだ。夏の部活の練習は想像以上にきつい。オフの日を楽しみに日々が過ぎていく感じがする。

そんな中、久しぶりに家族が揃った夕食で部活の話題になった。兄はサッカー部だったので、「練習メニューは自分が思っていた倍以上きつい。特に走るメニュー、普段車に頼っていた私には相当苦しい。」と伝えると、

「そうだね、でも辛かったからこそ楽しかったよ。」

と言われた。最初はそんなもんかと思ったけれど、なぜか頭から離れなかった。確かにそうかもしれない。苦手なことも辛いことも助け合える仲間と一緒に駆け抜ける中学校生活は、どこかで最高の青春になると思えた。

今までは夕方に家に居ることが少なく炊飯器でご飯を炊くこともしたことのない私が、家族のために母に教えてもらいながら青椒肉絲とスープとご飯の夕食を作った。とても美味しくできた。

翌日、母がパートに行った後に部活で軽食が必要なことに気がついた。覚えてた炊飯器でご飯を1合炊き、冷蔵庫にあった瓶の鮭を具に入れておにぎりにして持って行った。残ったご飯はタッパーに入れ冷蔵庫にしまい、急いで部活に向かった。

帰って来た母にその話をしたらとびきりの笑顔で「偉い、自分で考えてそれができたのってすごくいいね。」と言ってくれた。何だかバレエで入賞した時以上に母は嬉しそうだった。

私の兄は、夜のお風呂のために、言われなくても朝シャワーのついでだと浴槽を洗っておいてくれる人だ。そして母は毎日お風呂ありがとうと兄に言う。なんかいいなと思う。

普通のことがずっと続いていく日常。自分ができていることを増やす。一緒にいる人が心地よいことをする。時折、がむしゃらにバレエをしていた時の自分が「これで良かった？」と私に尋ねるけど、正直まだ分からない。始まったばかりの中学校生活で私がどんな風が変わって、動ける人になるのかが今は楽しみなんだと答えたい。

優秀賞（t v k賞）

池に行け

神奈川県立相模原中等教育学校 2年 ^{たきざわ}滝澤 ^{さほ}咲歩



「広い世界を見なさい。」

大人はこう言う。「狭い世界」よりも「広い世界」の方が好ましい、この考え方は今や世間の一般常識である。私はこれに対して、少なからず抵抗を覚える。誰でも広い世界に適応できると、そう考えるというのか。

井の中の蛙大海を知らず。このことわざは誰もが聞いたことがあるだろう。自分の狭い知識や考えにとらわれて、他の広い世界を知らずにいること。大海は知っておくべきである、という戒めの意味も含まれている。古人も広い世界の方がいいと考えていた。

しかし、広い海を知った蛙は幸せだったのだろうか。よほどポジティブな蛙なら別だが、自分よりもすごい者の存在を知って衝撃を受けていたりはしないのだろうか。海を知る前に戻りたいとは思わないのだろうか。いや、たとえそう思ったとしても、元に戻れはしない。それに、実際には蛙は海で生きていくことなどできない。私の勝手な解釈になるが、そこで暮らせないのに海を見るなんて、一体何のためにこんなことをしているのだろうか。たとえ井戸に戻ることを選んだとしても、今いるのは狭い世界の中だと知っている。もっと広い世界があることを知りながら、それでもその世界に身を置くことはできない。——そんなの、あまりに虚しい。

私が言いたいのは、広い世界を知ることが良いとは限らない、ということだ。広い世界を知ること、傷つくこともあるからだ。私も、身に覚えがある。小学生の頃はテストの点数も良く、ある程度の成績も取れていた。だが、中学生になり様々な人と出会い、自分以上に勉強ができる人がたくさんいることを知った。さらに、それは勉強に限ったことではなく、誰もが「自分にしかできない」ことを持っているように思えた。それまで自惚れていたのだろう。反動は大きく、しばらく自信を失っていた。これは、世界は広いと教えてくれた大切な経験だったに違いない。しかし、小学生の時のような狭い世界の中で酔っていたかったとも思った。「自分に都合の良い世界で楽に生きていたい」という意味に受け取られるかもしれない。それを否定はしないが、楽に生きることも時には大事だと思う。

また、このことわざには、後に続きが付け加えられている。「井の中の蛙大海を知らず。されど空の深さを知る」

と。井戸の中にいる蛙は海こそ知らないけれど、空の深さは知っている。それに、海を知っている鯨は井戸の中は知らない。狭い世界しか知らないからこそ、一つのことを突きつめて考えれば、より深い知識を得ることができる。例えば、歴史上の偉人も常識を知らないことがある一方で、一つの分野に関しては誰にも負けないほど詳しくあったりする。「されど空の深さを知る」という付け足しは本来なかったものだが、こう考えると前向きな意味としても捉えられる。

ただ、海を知ることが良いとは限らないけれど、海を知ってはいけないうけではないとも思っている。「海を知るべきだ」と考えるそれ相応の理由があり、そう考える人が大勢いたから「井の中の蛙大海を知らず」が作られ広まったのだろう。このことわざに、全面的には賛成できない。しかし、全てに反対したいのではない。私がベストだと考えるのは、「池」。井戸の中に住んでいる蛙は、一度池に行けばいい。きっと、もっと広い世界を見たいポジティブな蛙は海へ行くだろう。もし井戸の方が性に合うと感じるなら井戸に戻るし、池がちょうど良ければそこに住みつく。ちょっとだけ広い世界を覗き見て、あとは各自で判断すればいい。

人間だって同じだ。誰もが同じ感性を持っているわけではないのだし、自分の好きな広さの世界で生きていけばいいと思う。それを一概に「広い世界」に閉じ込めるのは、やはりどこか違う。どうすべきか迷ったら、池に行け。私はそう言いたい。

優秀賞（神奈川県青少年育成アドバイザー連絡協議会会長賞）

野球に学ぶ

慶應義塾普通部 3年 ^{ますい}益井 ^{えいすけ}英輔



中3の夏。シニアリーグ3年間の集大成となる大会を1か月後に控えていた僕たちは、熾烈なレギュラー争いを繰り広げていた。週末は朝から晩まで練習。平日も学校から帰宅すると何よりも先に素振りと筋トレをして一生懸命練習していた。全ては50人以上のチームメイトの中でたった9枠しかないスターティングメンバーに選ばれるためだ。

チームメイトはライバルであると同時に僕にとって最も大切な友達である。昼食時の雑談は楽しく、たまに勉強の相談に来てくれる友達もいて少し嬉しくなったりする。練習中はバッティングフォーム等でおかしいところがあれば指摘し合い、互いに高め合っていた。

チームのキャプテンと監督のリーダーシップは目を見張るものがある。試合中にも僕は全く気づかないような所のアドバイスをもらってヒットを打てたことが何度もある。彼らがなんとなく発した声も僕にとっては何かの気づきに繋がるものばかりで、陰ながら尊敬していた。そんなキャプテンと監督だからこそ選手全員がついて行こうと思ひ、こんなにも大好きなチームができたのだと思う。

このような日々の中、大会3週間前を迎えた。僕は英検を受けに行こうとしていた。せつかくの日曜日で野球ができるというのに英検なんて…と思っていたが、英検の勉強もずっと頑張っていたので受験日が週末と重なってしまうのは仕方ないと思ひ家を出た。

「行ってきまーす。」

次ただいまを言う時は自信満々な表情で、語尾には「多分受かった」が添えられていると思っていた。駅まで立ち漕ぎ自転車で快走しようと坂道前でペダルを踏み込んだその時。ギアが外れてペダルが空回りしたと分かったと同時に視界が90度傾き左肘に激痛が走った。今まで一度も経験したことのない痛みだった。骨折したかとも思ひ、まず野球のことを心配した。荒い息で、曲がった前輪を持ち上げ家に引き返した。

「ただいま。」

血だらけの肘で、野球ができなくなる可能性をかかえて絶望の表情で帰宅した。こんなふう帰宅するなんて1ミリも考えていなかった。母が病院を手配してくれている間も、病院で診察を待っている間も、骨折だけはし

ていないでくれと願ひ続けた。診察室に入り、お医者さんに言われた結果は…骨折、全治4週間だった。頭の中が真っ暗になった。大好きなチームメイトと大好きな野球ができなくなってしまう。そう考えるだけで泣きそうだった。家に帰って肘を90度に曲げながらベッドに寝転ぶと少し涙がこぼれた。

落ち着くと、骨折してしまったことを監督に報告せねばと思ひ電話をした。骨折したことを伝えると大丈夫かと心配してくれた。その時僕から、無意識にこんな言葉が出た。

「練習の手伝いだけでも練習に参加しても良いですか。」

咄嗟に出た言葉に自分もビックリした。すると監督は男前にこう言ってくれた。

「もちろんだよ。来いよ！」

その言葉は真っ暗だった僕の頭の中に光を差してくれた。この時、僕はチームメイトの練習をサポートすることができる。まだ一緒に野球ができるという希望を持ったのだ。電話を切った後、ベッドに寝転ぶと少し涙がこぼれた。もちろん数分前とは別の意味で。

翌週は生憎の雨でミーティングだった。ミーティング室に入るとチームメイトが大丈夫？とたくさん声をかけてくれた。そして僕の骨が治るまでに4週間ということは、1回勝てば僕が試合に間に合うということが分かり、必ず1勝しよう決めてくれた。本当にこのチームに入ることができて良かったと心から思った。

バッティング練習の球入れやノックの球出しをしていると、ありがとうと言ってくれるチームメイトがたくさん居てとても嬉しかった。コーチも大会前で忙しかったと思うが、空いた時間で打撃時の右手の使い方などを教えてくれた。それが効いて、驚いたことに、完治した今では骨折前よりも遥かに打球が強くなった。

今回の経験で分かったことは「谷もまた山である」ということだ。「山あり谷あり」という言葉がある。この言葉だと骨折時の僕は間違いなく谷に居た。しかしその谷があったことで友人や監督、コーチに恵まれていると、普段なんとなく感じていたことを実感できた。だから谷もまた山なのだ。これからもたとえ谷に居ようともそこに希望を見出して一生懸命生きていきたい。

奨励賞（神奈川県立青少年センター館長賞）

ピラニア人間

横浜市立大綱中学校 3年 おおむら 大村 りこ 莉子

「みんなやっているから。」

みなさん一度はこの言葉を口にしたことがあるのではないのでしょうか。例えば、買い物をする際、今流行しているものや売上ナンバーワンのものなど多くの人が手に取っているものを買ったり、周りの友達がマスクを外しておらず、自分だけ外すのはちょっと…などであったり、みんながやっているから自分も。みんながやっていないから自分も。そんな風に周りの波に飲まれ、結局自分自身では何も考えずに行動してしまった、という経験はありませんか。私たちが普段から強い「集団意識」をもっているからです。

みなさんはピラニアという魚を知っていますか。ピラニアはアマゾン川に多く生息する熱帯魚です。ピラニアという名前には「歯の魚」という意味があり、水しぶきをあげ一瞬にして獲物を喰いちぎる姿は、アマゾンを訪れる人々に恐れられています。そんな凶暴なピラニアですか、実験でピラニア1匹だけを水槽に入れたところ、泳がなくなり水槽の隅に留まるようになりました。大好物の肉を与えてもびくともしません。その後再び何匹かのピラニアを水槽に入れると、隅にいたピラニアは、群れの中に入り元気よく泳ぎ出しました。これはピラニアが普段から集団で行動しており、個々では行動しないからです。いくら個々が強くても、自ら行動しようとする力がないと、何もできないのです。これは人間も同じで、普段から自分の考えに寄らず周囲の波に身を委ねていると、いざ1人で行動するとなったとき何も考えられず、正しい判断ができなくなってしまいます。人の波に乗っているだけではだめなのです。

次にピラニアの群れの前に肉を入れました。しかし数匹のピラニアが肉の周りをうろつくだけで、なかなか食いつきません。30秒程して、1匹が食いついたと思うと次々にピラニアが肉に食いつき始めました。仲間の誰かが始めるまで他は何もしないのです。これは「集団意識」が強いが故に「自分の考えで行動するのは迷惑だ」という考えになり、指示がないと動けない状態に陥ってしまったからです。これでは1人の考えだけで行動してしまい、仲間の間違いに気づけず失敗してしまう可能性も考えられます。

私の入っている吹奏楽部では、50人以上の部員全員が

同じ目標に向かうためにひとりひとりが考えをもち、仲間が道を踏み外しそうになったときにはそれぞれの考えを伝え、吹奏楽部という集団が正しい道へ進めるよう、助け合います。集団であるからといってただ付いていくだけではなく、集団のためにひとりひとりが考え、また、それを伝えていかなければならないのです。

私は、日本人はもう少し自分の意志をもち、主張したほうがいいと思います。確かに集団の中で自分を発信することは少し勇気のいることかもしれない。恥ずかしいかもしれない。しかしそれ以上に社会は新たな波を待っていると思います。強い「集団意識」だけではなく、ひとりひとりが輝ける時代へ。流行に左右されやすい時代だからこそ、逆張りしていきませんか。

奨励賞（神奈川県立青少年センター館長賞）

「繋ぐ」

横浜共立学園中学校 3年 ^{くわばら} 葉原 ^{の の か} 野々香

青春。中学生最後の年になって、よく耳にするようになった言葉。定義がふわふわしているからか、少し照れくさくも感じてしまう。

私なりの青春だと思った出来事を思い浮かべると、学校行事や、毎日の他愛のない友達との会話や、みんなで一緒に食べたお弁当が挙げられる。

しかし、まだ私が小学生だった3年前、コロナウイルスの流行によって中高生が一生懸命準備してきた大会も、学校行事もたくさん中止になってしまったというニュースを見た。

時に、青春は制限される。これは時代が違っても変わらない。

去年の夏、私は家族で広島原爆ドームと平和記念資料館に行った。そこには、時間が止まったように恐ろしい壊れ方をしている建物と、たくさんの燃えた学生服やぐにやりと歪んだお弁当箱、皮膚全体が焼けただれている女の子の写真が展示されていた。

きっとこの学生服を着ていた子も、お弁当箱でご飯を食べていた子にも、友達がいて、毎日があった。実際に、女子寮でルームメイトと涙を流しながら、家族と離れた悲しみを分かち合っただけで友情を深めたり、偶然出会った出兵する前の歳が近い男の子と恋に落ちたりすることがあったようだ。

当時の青年達は、苦しみのなかにも、「青春」を見出していた。

しかし、原爆によってその日々は終わりを迎えた。事実、原爆で15,543人も10代の子供達が亡くなった。そしてそれ以上の数の青春が奪われた。

私の4つ下の妹は、原爆ドームに行ってからしばらく、そこで見た恐ろしい戦争の状況を思い出して、なかなか眠りにつけなくなり、泣いてしまう時もあった。早く忘れてくれるといいな、情けないことにそう思うってしまう自分が居た。でも妹は、夏の自由研究で、原爆ドームで学んだことをレポートすることにした。また寝れなくなっちゃうよ、と声をかけても、決めたから頑張るんだ、私がこれをクラスみんなに伝えなくちゃいけない、と泣きながらレポートを完成させた。

はっとした。確かに、苦しいこと、怖いことを忘れて無かったことにするのは簡単で、いくらでもできる。で

もその苦しかったこと、怖かったことがもう起きないように、もう誰もそんなおもいをしないようにしっかり向き合って伝える。それはとても勇気がいるし、難しい。

私たちは今、青春の日々を駆け抜けている。でもそれは楽しいことばかりではなくて涙を流したくなることもある。それでもそんな日々を過ごすことができなかった子供達がいた。そしてこの恵まれた青春はずっと続くことはないし、予期せぬ事態で終わることもある。私たちはこの青春を使って、過去のあやまちと向き合い、平和を学ぶべきだ。もう誰も戦争や原爆で、苦しくて怖いおもいをしなくていいように。無意味に、貴重な青春が途切れることがないように。

青春とは、繋ぐものである。

奨励賞（神奈川県立青少年センター館長賞）

小さな「被災」に目を向けて

藤沢市立鵜沼中学校 2年 ^{こじま}小島 ^{ゆづき}柚月

自分の誕生日を、避難所で迎えた経験が皆さんにはあるだろうか。

2019年10月12日夜、猛烈な雷雨を伴う台風が長野県に最接近した。この台風の動きは、長野市の祖父母の家に居た母と私にとって予想外のものだった。本来この台風は関東に上陸するはずで、母と私はそれをさけるために長野市まで来たからだ。

夜になるにつれて、台風なんて他人事だと思って余裕があった私にも、「避難」の2文字がちらつき始めた。それでもまだその時は、安全な自分の家から雷を見る感じ、そんな気持ちで、のん気に避難について話す母の話を聞いていた。

だがそんな浮ついた気持ちは、避難所へと向かって行くうちに打ち砕かれた。もう避難先の体育館が見えるという状況で登った坂は、私の想像以上に恐ろしかった。上からどんどん下ってくる黒い濁流、カーナビから鳴り続ける緊急速報。当時小学4年生だった私は、このまま車が濁流にのまれるのではないかとという恐怖と、必死な大人達に相手にされない孤独を感じていた。

何とか入った避難所の環境は良いと言えるものでは無かった。夜中で冷えてきた体育館にももちろんエアコン、なんて物はなく、配られた毛布1枚で一晩を過ごすことになった。

水が配られ、固く冷たい床に寝転んだ私は、避難生活というものの現実を思い知ったような気がした。こんな生活が何日も続き、いつ洪水に家が沈むのかおびえて暮らすことを考えると、今まで自分が考えていたものより、実際の避難生活は辛く苦しく、精神が疲弊するものなのだと実感した。

祖父母の家はどうなるのだろうかかと不安なまま、私は眠りについた。夜中に何度も、緊急速報で起こされていたが、いつのまにか収まり、気づいたら朝を迎えていた。体が痛かった。家の柔らかい布団とはまるで違う、固い床で寝ていたからだ。それでも、その痛みは、なぜか生きている、と実感できる痛みだった。

そして、おばや祖母がいた所へ向かうと、2人だけではなく大勢の人がベンチにもたれかかったり、壁に寄りかかったりしたまま寝ていた。みんなが避難しているこの状況で、横になり足を伸ばせて寝られていたことさえ、

当たり前ではなく、むしろ有り難いことなのだと、初めてわかった。

この、誕生日を避難所で過ごした経験は、たった1泊だけれど、私の災害に関する考えを大きく変えた。

今まで、災害といわれ私が見たのは、死者数や洪水に吞まれた街など、目に見える大きな被害だった。それだけでも、災害の怖さを知ることができるし、みなショックを受けると思う。

しかしそれでは、ニュースを見た人には、漠然とした感覚でしか、「被災すること」が伝わらないのだと思う。なぜなら私も、被災について漠然と捉えていた1人だからだ。

「被災すること」は決して、家が水びたしになったり、家族や友達が犠牲になったりすること、それだけではないと私は思う。

食べ物は毎日同じもの、アルミホイルや配られた毛布をかぶり、固い床で寝る毎日が積み重なっていく、それだけで、被災した人の大きな負担になっていくし、これからの未来についての不安が日々大きくなっていくこと、それも、立派な「被災」だと、私はこの経験を通じて思った。

あの日から、私は、もっと細かい、一つ一つの被害について目を向けて、被災した人達を支えられるような人になりたいと思うようになった。

私たちがこの国日本に住み続けていくならば、災害とは否応なく付き合うことになる。今この作文を書いているときでも、テレビでは沖縄での台風災害のニュースが流れているくらい、日本は災害大国だ。

それでも、被災について、知り、学び、備え、周りの人達とともに危機感を持ち続けることは、私たち一人一人にもできることだ。

中学生で、今すぐ災害ボランティアに向かうことはできない。でも将来、被災した人を支えられる人になることはできると思う。

そのためにも、今の自分にできることを、一歩ずつ、進めていきたい。

奨励賞（神奈川県立青少年センター館長賞）

私が私らしくあるために

横浜市立上永谷中学校 2年 齊藤 菜菜

私は、小学校4年生の時から保健室登校するようになりました。緊張や不安が強く、思うような学校生活を送れないことに劣等感や苛立ちを感じていました。

そのまま小学校を卒業し、私は中学生になりました。最初は少しでも長く学校にいる時間が増えるように学習室で勉強などをしていましたが、心身が追いついていかず、次第に行くことができなくなりました。

週3日、授業中誰にも会わないようにこそこそと職員室に顔を出し、提出物を受け取り帰る。家では趣味に浸り勉強もしない。そんな生活が続きました。

自堕落な生活を送り続け、1年が経ちました。

2年生になり担任の先生が変わりました。今年の担任は、1年生の時にも関わりがあった男の先生でした。

「担任ガチャ、外れたかな。」

そう思いました。

週3日間少しの間しか学校にいない私にとって、1年生の時の担任の先生以外は外れか大外れだけだったので。

始業式が終わって少し経った頃、先生から1冊のノートを渡されました。どうやらクラスの全員と交換ノートをするようで、それを私にも渡してきたようです。

「どーせ、いないも同然なのに。教師も大変だな。」

この頃の私は少し捻くれていました。

自分の事を棚に上げ、前を向かず目を背ける。学校に行かないことが普通になってしまった私は変わっていくことが怖くて、その為自分からはアクションをあまり起こしませんでした。この普通を、壊したくありませんでした。

交換ノートが少し続いた頃、個性の話になりました。

そこで先生は「ルールを守らず個性を生かしてくれ。」という人達がいるということを書いていました。

私は当時ハマっていたゲームなどにそれを当てはめ、自分の考えを書きました。

個性を殺すような規則は、多少緩くても良いと思うこと。

けれど、TPOなどを弁えないで個性ばかりに目を向けるのは人を不快にさせること。

現在の日本で個性を尊重するのは、難しいと思うこと。

規則を守り個性を生かすのがさらに難しいと思うこと。

私は人よりも自由な時間が多く、そういうことを考えさせられる機会もたくさんあったため、ありふれていながらも自分で考えて出した、自分だけの答えを持っていました。その事をノートに書いているうちに、それが自分にも言えることではないかと思えてきました。

学校にもろくに行かず、自堕落な生活を送っていることを個性だとは思いません。私のこれは、ただの惰性です。保守的、依存的な性格も相俟って、その習慣が壊れるのを恐れていることも、個性というには、あまりに消極的で良い印象を持ちません。

ですが、それで良いのです。それを含めて全部、私という人間なのです。

私はそう思いました。

怠惰で保守的で受動的。逆に言えば意思が固く、こうと決めたら何でも動かない。

それが私。そうじゃなければ、私の皮を被った狸です。

今はもう、変わることが怖くありません。まだ皆のいる教室には入れないけれど、それが今の私で私の今です。私はカメのように、他の人達からしたら遅くて苛々するようなスピードでも確実に成長して、変わっていきます。

最初は残念に思っていた先生にも、今ではとても感謝しています。

最後に、私と同じような境遇の中を生きる人達に届くと信じて、言いたいことがあります。

変わることを恐れている人もいるかもしれない。今ある辛い地獄から解放されたくて、死にたい、消えたいと思っている人もいるかもしれない。今の日本は、そういう人達にとって少し生きづらい国だから。

だけどそんなときは、頑張らなくても頑張れなくてもいいから、深呼吸して考えよう。

君が君らしく、私が私らしくこれからの社会を生きるために、どうすれば良いかを。

奨励賞（神奈川県立青少年センター館長賞）

目標という石に穴を開けるには

横浜市立大綱中学校 3年 ^{ささべ} 笹部 ^{あおい} 葵

「点滴穿石」という四字熟語を知っていますか。この熟語には「小さな水滴も長く落ち続ければ石に穴をあけられる」ということから転じ、「わずかな力でも積み重ねれば大きな仕事を成しとげられる」という意味があります。

水滴がぴちゃぴちゃと滴るのはとても地味なことで、穴をあけるのはとてつもない時間を要します。では、水滴と石を、人間と目標に置き換えてみるとどうなるでしょうか。1日だけ練習した。細部ができていないのに通しの練習をした。こんな1回きりの1粒の水滴では目標という名の石に穴をあけるのは無理だと思いませんか？じゃあがむしゃらに試合に出場し続ければいいのかというそうではなくて、その間には大量の細かな練習が必要なのです。

こんな風に、私は細かな練習を何度も行うことが、目標を達成するうえで最も大切だと考えています。

私は、4歳からピアノを習っています。今でこそ、合唱コンクールの伴奏をさせて頂きなどしていますが、はじめはそうではありませんでした。

はじめの頃は、ピアノに触らせてもらえませんでした。ひたすら、リズムの練習、譜面の読み方、音階の速読み……。地味なことばかりですが、1日1時間ちかく家で練習をしました。結果、いざピアノを弾くとなったときに、譜読みもすらすらと進み、弾きやすくなったのです。

その後もコツコツと部分ごとに切りとって練習したり、片手ずつ弾いたりして、順調に課題をクリアしていきました。

小学4年生の半ば頃に、新しく「ジーク バルティータ変ロ長調 BWV825」という曲を弾きはじめました。この曲は音数が多く、両手が交差するので、それまで弾いた中で一番難しいといえる曲でした。はじめの方から順番に片手で練習して……といつも通り練習していくと、だんだん弾けるようになって、楽しくなっていました。そこで、テンポを上げてみると、思いの外弾けたので、その速さのまま練習し続けてレッスンへ行きました。すると先生に、「速すぎるから、もっと遅く弾きなさい。」と言われ、持っていった速さよりも大幅にテンポを落とされたのです。また、両手の動きが合っていないから、片手で練習するように、とも言われました。

それから、テンポを上げずに練習する日々が続きました。ひたすら片手ずつゆっくり弾く練習。私にとって、地味でつまらない練習だったので、少しも乗り気ではありませんでした。

2、3週間したころ先生から、「では、テンポを上げてみましょうか。」と言われました。嬉しい反面、先生のつけたメトロノームを見て「こんなに速く弾ける訳ないじゃない。」と思いました。絶対失敗する、と思いながらも、試しに弾いてみると、なんと前よりも速いテンポでスムーズに弾けたのです。

このとき、もし3週間続けずに、3日4日で放りだしていたら、きっとこの曲は弾けなかったと思います。この細かくて、地味な練習を、何週間も続けたことが、その後の演奏にも役立っていると思います。

この「細かいことを続ける」ことは、他のことにも言えることで、漢字テストで点をとりたいなら漢字を何回も練習するし、試合などで結果を残したいなら基礎練習をたくさんすると思います。そして、これらの地道な練習を、何日も続けるのではないのでしょうか。

目標がどれだけ固い石かは分かりませんが、その石に穴をあけるには何千滴、何万滴といった大量の、小さな水滴を打ち続ける必要があるのです。

定規で描く円

神奈川県立相模原中等教育学校 2年 瀬尾 葵^{せ お あおい}

皆さんは定規とペンだけを使ってきれいな円を描くことができるでしょうか。

私が小学生だったときある授業の中で多様性について考える機会がありました。最初の質問もその授業の際に担任の先生にされた質問と同じものです。私のクラスには約40人のクラスメイトがいましたが、定規とペンだけを使ってきれいな円を描くことができた人はとても少なかったです。そんな私たちを見て、担任の先生はこう言いました。

「定規とペンだけで円を描くことはとても難しいですよ。でも、コンパスを使ったらどうでしょうか。すぐにきれいな円が描けてしまいますよね。しかし、定規を使えばきれいな直線がすぐに描けてしまいますが、コンパスではきれいな直線は描きにくいです。」

そして先生はこう続けました。

「人も同じようなものです。〇〇さんと△△さんがいるとします。〇〇さんはバレーボールが好きでバレーボールが得意です。△△さんはダンスを躍ることが好きでダンスが得意です。このことにどちらが良くて、どちらが悪いなどと評価をつけることはできません。どちらも好きなこととして、また得意なこととして素晴らしいのです。」

私はこの先生の話聞いて「自分の好きなものややりたいことが周りの人と違って良いのか。」ととても感動したことを中学2年生になった今でもよく覚えています。

というのも、実はこの授業を受ける前まで私は一つ大きな悩みを持っていました。それは、自分が何か行動を起こすと、すぐに「～らしくない」と言われてしまうことでした。例えば、「なんで休み時間に女の子らしく教室で遊ばないの。」だとか「そんな言葉づかいはあなたらしくないからやめなさい。」などの言葉です。私はこのような類の言葉によく傷ついていたことを覚えています。きっとそれは、私は私であるのに「女の子」や「周りの人から見た私」としてのイメージの中で生活しなくてはならないことが窮屈に思えたのでしょう。しかし、この授業を受けた後から、私は自分の行動に対して何か言われたとしても「これが私だから」と自分の行動に自信をつけることができました。

それから何年かたった今、私はすごく大切な友達ができました。その友達は他の人から見たら変わった考え方を

持っている友達で、私はその考え方が大好きでいつも仲良くしています。ですが、その友達は以前から考え方に対する周りの人の反応について悩んでいると、私に相談してきてくれていました。その相談内容を聞いて、私は先ほど述べた授業を受ける前の自分の気持ちが自分の中に渦巻いていくような感覚になっていました。なぜなら、友達がしてくれた相談の内容が、以前の私が悩んでいた内容と同じようなことだったからです。加えて、私はその友達の相談を聞いたときに友達の周りの人に怒りを感じました。どうしてかという、その子は「その子」として一人の人間であるのにも関わらず、自分たちと少し考えが違っただけで「変な考え方」というレッテルを貼ってしまうのは間違っているのではないかと考えたからです。

今考えてみると、私もこれまで人と人とを比べてしまうなどをして失礼な行動や言動をすることがあったかもしれせん。けれども、私は授業を通じて思ったことや、友達の相談を聞いて考えたことなどがあるため、できるだけその人自身を見て接するようにしています。私がこの作文を通してみなさんに伝えたいことは見た目や性別、他の人からの評価によって勝手に貼られたレッテルにとらわれて物事を判断してほしくないということ。それから、一人の人間のことを「その人」として見てほしいということ。周りの人はこうだからこの人はおかしい。」などと考えるのではなく「この人はこういう考えを持っているのか。自分とは違うけれどおもしろい。」とその人の個性として受け止めてみてほしいのです。このように考えるのは難しいかもしれませんが。しかしながら、「その人自身」を見て人と接する人が増えることによって変な常識に縛られることがなくなり自分も相手も生きやすい世の中を創りあげていくことができるのではないのでしょうか。

最後にもう一度聞きますが、あなたは定規で円を描くことができますか。コンパスでは円をきれいに描くことができますが、だからといって定規で無理に円を描こうとはしないですよ。人も同じように一人の人間として、「個」として「その人自身」として見てみてください。そうすることできっと誰かが救われることを私は願っています。

奨励賞（神奈川県立青少年センター館長賞）

「みんな」って誰？

横浜共立学園中学校 3年 田邊^{たなべ} 寛菜^{かんな}

「みんなそう言っているから」、「みんなはこう思っている。」でも、そのみんなって具体的に誰のことなんだろうと思ったことはありませんか。正体の見えない「みんな」に振り回されるのはもうやめにしませんか。私が主張したいのはこのことです。

突然ですが、私にはとっても大好きで仕方ない「推し」がいます。私の推しは、インターネットで歌をアップしたり、ゲーム実況をしたりする人です。推しは、自由人だけど、活動に対してとてもストイックな方で、そんなところが私はたまらなく好きです。そんな彼が、最近SNSである投稿をしました。その投稿は彼が煙草を吸うことをカミングアウトした内容でした。別に私は推しの身体が心配になったくらいなのですが、この投稿が少し炎上してしまったのです。この投稿を見た人から、推しは、全てが嫌になってしまうような罵詈雑言が詰まったメッセージがたくさん届いたそうです。この件について推しは配信でこう仰っていました。

「俺が何をしてもこういうコメントはいっぱいくる。でも、みんなキモイって思ってますよって何？主語がデカイんだよ。自分一人で意見言うの怖いから、みんなって言葉に頼っていない？」

全て暗記している訳ではないので正確ではないのですが、私はこの言葉にはっとさせられました。私の中にある何となく生きづらいという気持ちがこの言葉で具体化されたような気がしました。

「みんな買ってるから」、「みんなから嫌われたくない」。「みんな」に従うことに辟易しながらも、「みんな」から外されることを怖がり、「みんな」に従ってしまう。私はそんな矛盾を抱えて生きてきました。「みんな」から外れることは不幸だと思い込んでいたのです。でも今思えば、「みんな」に従うことで私は幸福だったのだろうかと思間に思います。

「みんなが買っているから」で買ったものは、結局すぐ飽きてしまったし、本音を押し殺して「みんな」に従ったことで良かったことなんて皆無だったと思います。そんな自分を幸せにしてもくれない「みんな」から外れることは不幸なことだったのでしょか。

きっと少し外に目を向ければ、全員が同じ方向を向いていた訳ではなかったと思います。推しの投稿の一件の

ように、アンチコメントを送る人もいれば、私のように何とも思っていない人もいます。全員が全員同じ意見だなんて正直ありえないです。そんな当たり前のことにすら気付けないほど、私は「みんな」と一緒にいるのに必死でした。

そうやって、「みんな」に振り回されて自分の主張をしてこなかった私だから、今ここですべての「みんな」に振り回されている人に向けて主張したい。

あなたが今、自分の本音を隠して従っている「みんな」は、一体誰のことなんですか？自分が嫌なことを嫌と言えず、好きなものを好きと言わせてくれない「みんな」の中に居てもきっと幸せになんてなれないはずですよ。

SNSが発達して世界中の人とつながれる今、「みんな」はもっと大きく得体の知れないものになってきていると思います。「みんな思っているから」と軽い気持ちで誹謗中傷をしたりする人も増えているように考えられます。私の推しの件もそのいい例でしょう。

でも、発信する前に考えてみて欲しいです。本当に自分もそう思っているのだろうか。本心からその人のことが嫌いでも傷つけてやろうと思っているのだろうか。主張や意見が正しいかどうかは決して数で決まるものではないと私は信じています。多くの人が言っているからと「みんな」に流されてしまっていては自分で考える機会がどんどん失われてしまいます。

だから、もう「みんな」に合わせる必要は無いと私は主張します。「みんな」から外れて少し一人になっても、必ずあなたのことを見てくれている人はいます。私はもう「みんな」に従うのをやめて、自分の嫌なことは嫌と言って、好きなものも堂々と好きと言える人になります。

みなさんも、私と一緒に「みんな」から外れてみませんか。

奨励賞（神奈川県立青少年センター館長賞）

「小さなことを大切に」

神奈川県立相模原中等教育学校 1年 戸高^{とだか} 颯南^{さな}

私はクラシックギター部に所属しています。総勢70名ほどの部員で、大小様々な種類のギターを使い、高音から低音まで合計6つのパートに分かれてアンサンブルをしています。その中で私は、低音部を担当しています。主旋律を弾くことは少ないのですが、曲に厚みを持たせるパートで、縁の下の力持ち的な存在です。

クラシックギター部が最大の目標としてかかっているのは、夏に開催される「全国学校ギター合奏コンクール」です。過去に何度も最優秀賞を取っており、今年の夏も最優秀賞を取るために、日々、部員全員で、全力で練習に取り組んでいます。

時が経つのは早いもので、もう入部してから3か月が経っているのですが、入部した当初から、先輩たちについていくのに必死です。中高一貫校なので、中学生から高校生までがいっしょに活動しています。高校2年生や高校1年生は、練習にかけた時間だけでなく、数々の演奏会で経験を積んでいるだけあって、ギターがとてもうまいです。音量も大きいし、音質もきれいだし、そして何より、指を動かす速度が速いです。その先輩たちに追いつこう、追いつこうと思うのですが、まだまだ自分の実力が足りず、「弾けない…どうしたら、先輩たちみたいに上手に弾くことができるんだろう…」と悩む毎日です。もうとにかく、自分のことで精一杯で、自分の音だけしか考えてなくて、同じ部活の仲間や同じパートの先輩たちといっしょに演奏しているのに、自分の演奏、自分が弾いている旋律のことだけで頭がいっぱいなことがまだまだ多いです。

私は低音部なので、高音部の人の演奏と合わせる機会もありました。けれども、自分の音だけしか聞こえてこなくて、自分一人の世界にいました。それでも、練習を重ねていくうちに、だんだん周りの人の音や、高音部の人の音も耳に入ってくるようになりました。しかし、耳に入ったというだけで、まだまだ、いっしょに一つの曲を弾いているという実感はありませんでした。

ある8月の日のことです。冷房が効いた視聴覚室で、いつものように先輩方と演奏を合わせていました。

その時です！これまでも、周りの人の音は聞こえていました。しかし、それまでは自分の演奏を含めて、単なる音の連なりとしてしか聞こえていなかった部分が、大

げさかかもしれませんが、曲に、音楽に聞こえたのです！それまでの努力が実を結んだ瞬間でした。横で弾いている先輩たちとの呼吸もぴったり合う。これは、私にとっては初めての経験で、新しい扉が開いたような感じがしました。コンクールでの演奏に比べたら、たった1回の練習の中で起こった小さな出来事ですが、先輩たちと息が合った瞬間、体がカーッと熱くなり、汗をかくぐらい、うれしさが込み上げてきました。「弾けた！呼吸があった！」と思いました。コンクールで最高の演奏をすることがうれしいことだと思っていたのですが、「大きな目標の前に、こんな喜びがあったんだ！」と感動しました。体感としてビビッと来た瞬間で、あこがれの先輩たちに近づくために、もっともっとがんばろうと、部活動がいっそう楽しくなりました。

賞を取ったり試合に勝ったりするなど、努力が報われる瞬間は誰にでもあると思います。しかし、その結果を手に入れるまでにある、日々の練習の積み重ねの中にかくれている小さな喜びに目を向けることこそが、むしろ大事なんだと気づきました。

私は、クラシックギター部のアンサンブルを通して、日々の小さな喜びに気づくことができました。私はこの気づきを、これからの演奏、そして、これからの日常生活にも活かしていきたいです。大切にしていきたいです。誰もが小さな喜びに気づいて、それを大切にしたら、毎日がぐっと楽しくなると思います。

奨励賞（神奈川県立青少年センター館長賞）

「当たり前」をつくる

横浜市立大綱中学校 3年 ^{ふかほり} 深堀 ^{あやみ} 絢心

東野圭吾さんの「片想い」という本を読んだことがあるのでしょうか。私は最近この本を読み、衝撃を受けました。この本の中で鍵を握っているのが、「性同一性障害」のことなのです。きっと、一度は耳にしたことがある言葉だと思えます。これの何が衝撃なのか、とも思いますが、この本が刊行されたのは、2001年なのです。日本で性同一性障害特例法ができたのは2003年。WHOが国際疾病分類の精神障害の項目から性同一性障害を除外したのが2019年です。分かったでしょうか。「片想い」は世界を先取りし、未来を見通したような作品なのです。2001年当時、性同一性障害というのは、誰もが聞いたことがある単語ではなかったんですから。

当たり前ではないことにアンテナを張る。少数派に目を向ける。「当たり前を疑い、よりよい当たり前をつくる」ことにこそ、社会をよりよくする鍵があると思えます。ここで言う当たり前とは、大多数の人に共通する考え方とします。では、今の「当たり前」は、よりよい当たり前とは、なんでしょうか。

1945年8月6日、午前8時15分、原爆投下。日本の誰もが知っている日時です。世界で唯一原爆が投下されたこの国で生きているからこそ、私たちは平和について、何度となく考え、感じています。「二度と戦争を引き起こさない」。これが、今の日本の中学生の一つの「当たり前」の形です。太平洋戦争中は、国のために命を懸け、戦争をすることが「当たり前」でした。もちろん、心のどこかでおかしいと思っていた人もいましたが、大多数の人はそういう考え方の人を非国民として迫害していました。このように、時代や風潮によって「当たり前」は変化しています。

2022年2月24日から始まったロシアウクライナ戦争。今もロシアはウクライナを攻め続けています。私は、戦争は決して過ぎ去った出来事ではないのだと思い知りました。戦争の悲惨さを、日本では小学生でも知っているのに、なぜ戦争するのでしょうか。政治的に、とかいろいろあるのですが、そんなこと関係ありません。今、この瞬間も、家族と離れ離れになっている人がいます。たとえ原爆が落とされた国でなくとも、2回に及ぶ世界大戦による被害を知らないわけではないはずですが。それなのに、戦争していることを「当たり前」だと思う世代

を増やすつもりなんですか？

今の社会の「当たり前」をつくっているのは、周りの大人や環境です。今の私の考え方も、平和学習や、普段の会話を通してできた考え方です。しかし、いくら環境だと言っても私達が環境をつくるには限界があります。何か言うにしても、中学生が言うのと内閣総理大臣が言うのでは、当たり前ですが重みが違います。もちろん、中学生が言うことで説得力が増したり、刺さったりすることもあるけれど、それはごく一部の事例に限られます。実際問題、今の私達にできることはそう多くはありません。

ですが、10年後、20年後に社会を動かしていくのは私達です。私達には、戦争を知っている世代が身近にいません。これから戦争が起こらない限りは、私達が大人になるころには、日本では社会全体でもほとんど、もしかしたら一人もいないかもしれません。それは幸せなことであり、また危険なことでもあります。だからこそ、悲惨な出来事を繰り返さないために、今の平和を、「当たり前」を引き継いでいかなければなりません。

今、私は戦争や紛争が世界で起きていることに心を痛めています。私が大人になるころに、日本が当事者になっていないといいと思います。日本では、今戦争や紛争に直接関わってはいませんが、世界のどこかでは起こっています。「二度と戦争を引き起こさない」。いつか、日本のこの感覚が、世界中で「当たり前」にできるように、一人ひとりが努力していくことが大切だと思います。

奨励賞（神奈川県立青少年センター館長賞）

「見る」

横浜市立生麦中学校 3年 ^{やなぎはら}柳原 ^{ももこ}萌々子

1945年3月26日、沖縄の慶良間諸島に米軍が上陸し、沖縄戦が開始した。

この簡素な一文に、当時どれだけの恐怖や不安が見られたのか。令和を生きる私達のほとんどが、その時を感じることはできません。国同士の戦いに民間人が巻き込まれ、米軍と民間人が接触した唯一の場所、それが沖縄です。特に南部の方は激戦で、多くの住民が命を落としました。東京大空襲や広島・長崎の原爆投下とはまた違った恐怖があった場所です。

今年の5月、私は修学旅行で沖縄へ行きました。2泊3日という短い間でしたが、伊江島での民泊体験を通して横浜とは違った環境での暮らしを知り、充実した時間を過ごすことができました。そんな楽しい思い出も多い中、私が一番印象に残ったのは、1日目に訪れた平和祈念資料館で見たとある写真でした。資料館には沖縄戦に至るまでの歴史や戦争が起こるまでの経緯の展示、沖縄戦体験者の証言などの資料がありました。私は、一つ一つの展示をゆっくり見ながら歩いていました。いつの間にか周りにほとんど人がおらず、同じクラスの友達と静かに回っていました。ふと時計を見ると集合時間が近づいており、時間に間に合うようペースを上げました。その時、友達が「ねえ、ももこちゃん。」と私を呼びとめました。彼女は、1枚の大きな写真を見ていました。その写真には目を閉じ、ぐったりした様子で倒れた数人が写っており、どこか「亡くなっている」ことを感じさせる雰囲気は漂っています。そのフロアには他にも、銃で撃たれた幼い男子の亡骸など、戦争によって殺された人々を写した写真が展示されていました。

戦争は人を殺すのだと、初めて「見た」瞬間でした。

私は今までに何度も戦争について調べたり、ドラマなどの映像を見たりしてきましたが、自分の中のどこかで戦争は遠い過去の話だと思っていたところがありました。しかし、この写真を見て、戦争がすぐ隣にいるかのように感じました。あの写真を見たその瞬間を、私は忘れられないと思います。

「見る」という行為は、私達にとって大きな役割を果たしています。それは実態をもつものに限ったことではなく、元々形のないものを「見」て、心に映すこともできます。「見る」ことで、私たちはいろいろなことをより

はっきりと認識できるのです。

戦時下での出来事は、私達若者には「見る」機会があまり多くありません。では、みなさんは「見せる」活動をしている人達を知っていますか？沖縄・八重瀬町の向陽高校の生徒達は自らがガイドとなり、同世代の生徒達に沖縄戦について伝える取り組みをしているそうです。ガイドをした生徒は、「ガイドをする前は不安もあったけど、練習をする中で学んだことを他の人にも伝えていこうという思いが強くなった。」と振り返っており、自らが伝える側になるという意識が深まっているのが印象的でした。このように、自ら学び、「見せる」側になる活動している人がいるのです。

歴史は、時間が経つにつれ私達から遠のいていきます。過去のものとして、私達の記憶から薄れ、劣化していつてしまうのです。

私達はそんな歴史を繋ぎ止め、次の世代へ渡していかなければいけません。中には戦争のように「見る」こと自体、あまり多くないものもあるでしょう。しかし、そんな私達に「見せる」活動をしている人々がいるということを知り、その記憶を繋げてほしい。きっと、私達の代で戦争体験者の話を実際に聴くことは最後となるでしょう。だからこそ知ってほしい。「見」てほしい。私達の見てきた記憶を次の世代の記憶へと連鎖させていくことが、戦争を感じることでできない私達の唯一の役目なのだから。そう、心にとどめ、戦争を「見」てみてはどうでしょうか。

「見る」ことは、私達の記憶の糧なのです。

私が歩む夢への道

鳥取県 米子市立東山中学校 3年 矢曳^{やびき} 未来^{みらい}

私は障がいを持っている障がい者だ。生まれつきではなく、6年前に交通事故に遭ったことで後遺症が残ってしまったのだ。事故後のショックで歩けなくなった。記憶力が低下した。集中力が続かなくなり、些細なことで疲れて怒りっぽくなった。私はその後遺症を負ったことで、できないことが増えた。生活に関する不自由、勉強に関する不自由、その他色々なことで前の自分のほうが良かったと思う。最近では怒りの気持ちより、悲しみの気持ちが増えたように思う。

私には2つ上の姉がいる。私は今、中学校3年生だから、高校進学を考えたときに真っ先に頭に浮かんだのは姉だった。姉と同じ高校に行きたいと思った。けれど、それはとても難しい選択だと知っていた。私には障がいがあり、姉とは違うからだ。障がいを負ったことで、勉強に集中して取り組むことが難しくなり、できることよりできないことが増えた私に高校進学なんてできるだろうかと考えた。今は自分の体の状態が少しずつわかってきたからこそ言えることだが、私には普通校進学は難しいのだろうと考えている。けれど、前は変わった自分を受け入れられなかった。やれば私はできる。元のように戻れると考えていた。そう思って中学校に通ってきたが、今となってはそれも難しいということを知った。大きくなるにつれ、自分の体がわかってきたからだ。自分を知るというのは、辛いことなのかもしれない。私は、そのことを理解したときから、なんだか体の力が抜けて悲しくなった。私は、もしかしたら小学校から中学校に上がる時、事故に遭う前の自分に戻りたくて、姉と同じ東山中学校を選んだのかもしれない。

そんな理由で選んだ中学校だけど私は今、その選択をして良かった、幸せだと思う。なぜなら中学校に通っていると、先生たちが私を本当に大切にしてくれているということがわかるからだ。それは、私が今、何よりも欲している気持ちだ。また、中学校に通うことで、同級生と一緒に勉強をすることができた。勉強だけでなく、色々なことに挑戦させてもらえた。委員会活動や応援団に参加すること

ができた。そしてこの3年間を通して、私は全てが全て融通が効くわけではないということも知ることができた。

私は大人になったら、支援学校や支援学級の教師になりたい。中学校の先生達が私を大切にしてくれているように、私も教師になったら、支援学校や支援学級の子供達を大切にしたい。生まれつきの障がいがあったり、体が不自由で普通校には通えなかったりする子供達に「あなた達には居場所がある、一人ではない」ということを知ってもらいたい。そのために私は自分を見つめ、自分にできることを探していききたい。だから私は、高校は養護学校に行きたい。養護学校で自分の可能性を見つけ、自分にできること、誰かの役に立てることを探していききたい。

私は最初からこのような考えを持っていたわけではない。最近になってやっと「できない自分」を受け入れられるようになってきたのだ。小さい頃から頑固で、これだと決めれば、周りの人の言うことなんて聞かなかった。だから事故に遭って同年代の人達より、できないことが増えたということが、ものすごくコンプレックスだった。

けれど、もうそれは過去の話だ。今の私はこうなのだから仕方がない。この考えは、自分ではできないと諦めたのではなく、自分を認めたのだ。私は、私なりの道を歩むことを願う。私は自分の歩幅でゆっくりゆっくり「私の夢」を叶えようと思う。目的地へ時間をかけて進んでゆくカタツムリのように。私の夢はどこまでも続いていく。

実施概要

1 目的

中学生が、日常生活の中で考えていることを作文にして発表することを通して、広い視野と柔軟な発想や創造性ととも、物事を論理的に考える力や自らの主張を正しく理解してもらう力を身につけることを目的とする。

2 主催

神奈川県立青少年センター 独立行政法人国立青少年教育振興機構 神奈川県

3 後援

神奈川県教育委員会 神奈川新聞社 **NHK**横浜放送局 **tvk**
神奈川県青少年育成アドバイザー連絡協議会

4 対象

神奈川県内在住または在学の中学生（国籍は問わないが、日本語で発表できること）

5 応募期間

令和5年6月1日（木）～9月4日（月）

6 発表大会

- (1) 期日 令和5年9月24日（日）14:00～16:15
- (2) 会場 県立青少年センター スタジオ HIKARI
- (3) 視聴者 87名
- (4) 内容 作文発表（優秀賞以上の7名） アトラクション 表彰

7 選考

- (1) 作文審査（事前審査）
審査会において作文発表大会出場者と奨励賞受賞作文を決定
- (2) 発表審査
作文発表大会において、最優秀賞と各優秀賞を決定
（審査員）

神奈川新聞社報道部記者兼論説委員	成田 洋樹
神奈川県公立中学校長会（大和市立光丘中学校校長）	溝口 広幸
神奈川県青少年育成アドバイザー連絡協議会会長	佐藤 節子
教育局支援部子ども教育支援課専任主幹	武下 憲史
神奈川県立青少年センター副館長	柁 晴美

8 表彰

- | | |
|-------------------------------|-----|
| ・最優秀賞（神奈川県知事賞） | 1名 |
| ・優秀賞（神奈川県教育長賞） | 1名 |
| ・優秀賞（神奈川県福祉子どもみらい局長賞） | 1名 |
| ・優秀賞（神奈川新聞社賞） | 1名 |
| ・優秀賞（NHK横浜放送局長賞） | 1名 |
| ・優秀賞（tvk賞） | 1名 |
| ・優秀賞（神奈川県青少年育成アドバイザー連絡協議会会長賞） | 1名 |
| ・奨励賞（神奈川県立青少年センター館長賞） | 10名 |

9 応募状況

- ・応募者総数 745名
- ・参加学校数 25校

令和5年度「中学生の主張 in かながわ」記録集

編集・発行

神奈川県立青少年センター

〒220-0044

横浜市西区紅葉ヶ丘9-1

電話 045-263-4466

ファクシミリ 045-242-8190

本記録集の無断複製、転載等は禁止いたします。



動かす
未来を
わたしの
つぼみ

